令和元年度　成績概要書

課題コード（研究区分）：　4104-426500　（道受託研究）

１．研究課題名と成果の要点

１）研究成果名：令和元年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫

（研究課題名：令和元年度病害虫発生予察調査）

２）キーワード：病害虫発生予察、注意すべき病害虫、新発生病害虫

３）成果の要約：令和元年度に実施した病害虫発生予察調査から、多発傾向にあった病害虫として 12 病害虫を示す。また、令和 2 年度に特に注意を要する病害虫として 5 病害虫について防除指導上の注意を喚起する。さらに、令和元年度に新たに発生を認めた病害虫として 17 病害虫（病害 8、害虫 9）を示す。

２．研究機関名

１）担当機関・部・グループ・担当者名：中央農試・病虫部・予察診断G・岩崎暁生、
中央農試・病虫部・クリーン病害虫G、上川農試・研究部・生産環境G、
道南農試・研究部・生産環境G、十勝農試・研究部・生産環境G、
北見農試・研究部・生産環境G、花･野菜技術センター・研究部・生産環境G

２）共同研究機関（協力機関）：北海道農政部技術普及課、北海道農業研究センター、
北海道病害虫防除所、（全道農業改良普及センター）

３．研究期間：令和元年度　（2019 年度）

４．研究概要

１）研究の背景

病害虫の発生はその年の発生状況や気象経過のほかに、前年の発生状況の影響を受けるため、効率的な病害虫防除を実施するためにはそれらを踏まえた全道的な情報が求められる。また、道内で未確認の病害虫が突発的に発生するため、迅速な対応が求められる。

２）研究の目的

全道での病害虫発生状況を新発生病害虫も含めて記録し、これをもとに次年度に注意すべき病害虫を示して防除指導にあたっての注意を喚起する。

５．研究内容

１）農作物有害動植物の発生状況

・ねらい：農作物有害動植物の発生状況を記録する

・試験項目等：18 作物･86 病害虫の発生状況を調査

２）突発および新発生病害虫の診断試験および調査

・ねらい：道内で新たに発生した病害虫を同定し記録する

・試験項目等：発生調査、再現試験、同定試験

６．成果概要

１）令和元年に多発～やや多発した病害虫

(1) 水稲：ヒメトビウンカ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、イネミギワバエ

(2) 秋まき小麦：赤さび病

(3) 春まき小麦（春まき）：ムギキモグリバエ

(4) たまねぎ：タマネギバエ・タネバエ、ネギアザミウマ

(5) だいこん：軟腐病

(6) りんご：黒星病、斑点落葉病、腐らん病、ハダニ類

２）令和 2 年度に特に注意を要する病害虫

(1) 秋まき小麦の赤さび病

近年、赤さび病に対する抵抗性が”やや強”である主力品種の「きたほなみ」において発生が目立っており、抵抗性”弱”品種に準じた防除が必要な状況になっている。上位葉に発病が認められてからの防除では十分な効果が得られないため、発病が懸念されるほ場では、止葉抽出から穂ばらみ期に１回、開花始に１回の薬剤散布が必要である。

(2) 秋まき小麦の土壌病害

本年、道東地方では縞萎縮病の発生が目立った。また、道央地域では立枯病の被害を受けたことにより

早期に枯れ上がるほ場が散見された。また、近年問題となっていたなまぐさ黒穂病においては、病原菌が土壌伝染することが明らかにされた。これらの土壌病害に共通する対策として、連作や短期輪作を避けることが重要である。

(3) 野菜類のネギアザミウマ

たまねぎ、ねぎなど野菜類の重要害虫で、高温少雨条件で多発しやすい。近年キャベツなどで結球内部を成虫が加害することによる品質低下も報告されている。薬剤防除においては、防除開始適期を逸しないこと、効果の高い薬剤を使用すること、適切な間隔で防除することが重要である。

(4) りんごの黒星病

本年も発生が多く、伝染源が多いと推測されるため、散布間隔の開きすぎや散布水量不足に注意して丁寧に薬剤を散布する。また、平成30年度にQoI剤に対する耐性菌やDMI剤に対する感受性低下菌の発生が確認されたため、薬剤の選択には特に注意が必要である。

(5) りんごの腐らん病

近年の多発傾向により、伝染源が多いと推測される。り病部は1年を通じて胞子を分散させるため、園地を良く観察し、被害部を発見した場合、早期に削り取り、ゆ合剤を塗布する。除去した被害部や剪定枝は園外に搬出する。また、樹勢を維持するための基本管理も重要である。

3）新たに発生を認めた病害虫

(1) 小麦のミドリハダニ（新寄主）
(2) ばれいしょの黒あし病（病原の追加）
(3) とうきの苗立枯病（新発生・病原の追加）
(4) とうきのハイイロオオササベリガ（新寄主）
(5) かぶの腐敗病（病原の変更）
(6) ゆきな（ターサイ、雪菜）のリゾクトニア病(新称・国内新発生)
(7) ほうれんそうの株腐病（病原の追加）
(8) トマトの炭疽病（病原の追加）
(9) りんごの黒星病（薬剤耐性菌の出現・薬剤感受性低下菌の出現）
(10) りんごのリンゴコスカシバ（国内新発生）
(11) りんごのブドウワタカイガラムシ（新寄主）
(12) ぶどうのヤマブドウハコブタマバエ（新寄主）
(13) ぶどうのブドウトックリタマバエ（新寄主）
(14) ぶどうのイッシキブドウトリバ（新寄主）
(15) ぶどうのリンゴハダニ（新寄主）
(16) ぶどうのブドウサビダニ（新発生）
(17) スターチスのウイルス病（新発生）

○新称：これまで正式な名称（病名、害虫の和名）のなかった新たな病害虫の名称提案。
○国内新発生：これまで国内での発生事例がなかった病害虫
○新発生：道内での発生事例がなかった病害、道内に分布が確認されていなかった害虫
○新寄主：道内に分布することが既知である害虫の、新たな作物への加害記録
◯病原の追加：既知病害と病徴に違いのない新たな病原の追加
○薬剤耐性菌の出現：道内での発生事例がなかった薬剤耐性菌の出現
○薬剤感受性低下菌の出現：道内での発生事例がなかった薬剤感受性低下菌の出現
○病原の変更：既知病害の病原について再検討され、異なる病原であることが明らかとなったもの

7．成果の活用策

1）成果の活用面と留意点

ここに記載した病害虫について、特に今後の発生動向に注意する。また、令和2年度に特に注意を要する病害虫については適切な防除対策を講じる。

2）残された問題とその対応

8．研究成果の発表等